翻刻

古活字本『べんけいざうし』（上）

下房俊一

略解題

ここに翻刻紹介するのは、島根県某家の所蔵にかかる古活字本『べんけいざうし』である。いま、その書誌的な面に限って、ごく簡単に触れておく。なお、内容その他に関しては、「古活字本『べんけいざうし』について」（島大国文、6）で述べる予定である。

『べんけいざうし』上下二巻二冊。古活字本（元和・寛永頃刊か）。表紙、赭。綴糸、紺。寸法、縦二七・二センチ、横一九・〇センチ。題簽、左上、白紙に「へんけいざうし巻上」「へんけいさうし巻下」と墨書。内題、「へんけいさうし巻上」「へんけいざうし巻下」。丁数、巻上三一丁、巻下三〇丁（第三〇丁裏は白紙）。柱刻、「上一」「上二」「下三十」のごとく丁付がある。刊記はない。

各半丁一一行、各行約二四字。字高、二三・一センチ。漢字・平仮名混り。振仮名付漢字および濁点付仮名を含む。

巻上および巻下の表紙に「雑號」の貼紙があり、また「へ〇」の符号を朱書する。巻上の表紙の一箇所、巻下の表

紙の二箇所に、某（享保十五年没、六十一歳）と名を墨書し、また、巻上の表紙に花押のごときものが微かに認められる。巻上、巻下ともに第一丁表には、その継嗣（天明四年没、六十八歳）の印および「某家之印」の二種の蔵書印がある。

凡例

一、本稿には『べんけいざうし巻上』のみを収める。『巻下』については、本紀要第11号に収める予定である。
一、漢字・平仮名の区別、振仮名、濁点の有無、仮名遣い、踊字については、すべて本のままである。
一、ただし、漢字の字体は現代通用のものとし、いわゆる異体字等もこれに統一した。
一、「ハ」「ミ」の仮名は、平仮名と認めて「は」「み」に統一した。
一、「こそ」「こと」等の合字となったものについては、便宜「こそ」「こと」等とした。
一、脱字、衍字、その他明らかに誤植と認められる箇所等については、（マヽ）と注記し、判読不能の箇所は□として残した。
一、適宜、段落を用い、句読点および括弧「　」を施した。（底本で改行のあるのは、第二五丁裏および二六丁裏の歌の部分のみである。）
一、各半丁の終りごとに、（1オ）、（1ウ）等の略号で、それを示した。

翻刻

へんけいざうし巻上　（題簽）

へんけいさうし巻上　（内題）

れうぎんすれはくもおこり、とらうそふけはかせさはく。かゝるためしあるにより、むさしばう弁慶かゐたる所に、いさかひのなき事なし。

そも〳〵此へんけいと申は、起州熊野の別当弁心か子なり。このへんしんは、四十にあまるまて子一人もなかりけり。ふうふこれをかなしみて、にやく一わうしへさんろうして、申子をそいのりける。誠にわふじふひんにやおほしけん、とびの羽一つたまはると御むさう有て、へんしんの北のかた、やかてくはいにんしたまひける。九月のくるしみをすき、十月と申にむまれす。かくてとしつきをふるほとに、みとせ三月にて（1オ）さんのひほをときたまふ。此有さまをみれは、よのつねの三つごほとなるが、かみはかたまておひさかり、眼はとらのことくにて、おくは、むかふはおひそろひて、あしのすちほねあら〳〵とたくましうして、おそろしきありさまなり。むまるゝとひとしく、ひちをつひておきなをり、東西をきつと見まはして、かしらをふりあけ、「あらあかや」といふて、から〳〵とそわらひける。へんしんこれをみて、「荒あさましの事ともや、あたはぬのそみを申により、鬼子をさつけたまふ、かなしや」とて、こしのかたなをぬくまゝに、すてにかいせんとしたまへは、はゝのじひのありかたさよ、弁心の袖にすかり、「しはらくまたせ給へとよ、らうしは（1ウ）七十ねんかあひた母のたいないにやとり、ひんひけしろくなりて生れさせ給ふとうけたまはり候そや、是も三年の春秋、たいないにておくりたる事なれは、ものをいふこそだうりなれ、六しゆ四しやうのその中に、いかなる人なれはわれらかはらにやとる覧、たま〳〵にんけんかいにむまれたるものを、月日のかけをたにおかませすして、つるきのさきにかけ、二度しゆらたうへおとさん事こそふひんなれ、にやく一わふしより給りたる子なれは、いかさまやうこそあるらんに、御こゝろにあたはすは、うんにまかせ野山にもすてたまふへし、善悪をは神りよにまかせて御らんせよ」と宣へは、へんしんけに（2オ）もとおもひ、「さらはとも

かくもはからへ」とて、一日たにもやういくせす、ふかきやまへすてられけるか、さすかおんあひのかなしさは、こらうやかんもふくしけん、またはうへてもしするならは、けうやうせんとて、七日と申に人を見せにつかはしけれは、しなん事は思ひもよらす、ある木のもとにこのみをひろふてふくしつゝ、せいするものゝあらされは、おもふまゝにあそひけるか、此つかひを見つけて、「おのれはなにものそ、我むかひに来るか」とて、はしりかゝりけれは、此こゑをきくより、きもたましゐも身にそはす、とつて返しにげけれは、あとをしたはんとしたりけるを、こゝかしこにけかくれて、やう〳〵にけ（2ウ）のひ、あせみつをなかし、大いきつひてかへり、へんしんのまへにかしこまり、しはらく物をもいはさりけり。女はう是を見て、「あなあさましや、いかなる事そ」ととひ給へは、「さん候、申もおほそれ入て候へ共、此山ははや鬼のすみかとなるへく候、それをいかにと申に、むまれたまひていまた十日にもたらさるに、あらけなふおひたち給て、それかしをめかけ追たまふを、やう〳〵にけのひて、これまて参りたる」よし申けれは、弁心聞て、「やすからぬ事かな、ころすへかりつるものを、深くせいしたまふゆへそ」とて、こうくはいしたまひけり。其後、此山へ入ものはなかりけり。誠ににやく一わうしの氏子なれは、こらうやかんも守護（3オ）しけるか、三七のほとをそおくりける。

其ころみやこに五条の大なこんと申人おはしけるか、これも子のなき事をかなしひ、後世菩提の事を心くるしくおほしめし、にやく一わふしへ参り、いのり申されけれは、七日にまんするあかつき、ふしきのじけんをかうふりけり。「このやまのかたはらに、うちこ一人すてをきたり、とりてやういくし給へ、今生は悪人なりとも、後世ほだいはたすくへし」と、御むさうにあつかつて、夜のあくるをまちかね、人をおほく山へいれ、かなたこなたをたつねけるほとに、かのおさなき人にたつねあひ、「これこそ大納言殿の、御むさうに得させ給ふ御子よ」とて、やかてこしにいたきのせ、（3ウ）しゆくしよにそかへりける。みめかたちはあしけれとも、目もとたゝしく、何様たゝものと

はみえさりけり。大なこん、おほきによろこひたまひて、やかてにやく一といふなをつけ、てうあひかきりなし。

かくてすき行程に七歳の春のころ、ひゑいさんさいたう、はゝきのりつし、けいしんのはうへのほせられけるか、此ちこ、せいしんにしたかひて、一を十共さとり、筆をとりてはめうをえたり、ふんをまなふにくらからす。しくはんのまとにむかひ、しいか、くはんけんのみちにもたつしやなり。しゆゑん、らんぶの上すのなをえたり。たゝしこゝにせうしこそあれ。ひくれぬれは、ていしやうのしらすに出て、直垂のひほをはつし（4オ）、はかまのそはをたかくとりて、のりこえ、はねこえ、ちからくらへ、ゆみはつねのあそひとて、たち、なきなたのさやをはつし、をうつかへひつ、ぬけつくくつつ、ふけいのたしなみしきりなり。あたりの坊のちこたちと、かけあわせていさかふ事せひなし。そののちかちをちかつけて、一尺八すんにかなぶちをうたせ、八かくにかとをたてゝ、かと〳〵にやいはをつけ、あひのひしをはいが〳〵とほらせて、こくしつにぬらせ、もち所をはふたへかはにて、がんきかたにまかせたるをみきのこわきになし、あつこうちやうちやくするあひた、らうにやくしゆかくのもの共、にやく一殿のてにかゝり、きすをつかぬはなかりけり。はし（4ウ）めの程こそししやうにも、ちゝ大納言にもめんしけれ、此事度〻におよふ間、一さんの大しゆこと〳〵くとうしんにて、そせうをせられける。「そも〳〵当山は一ちこ二さんわふの事なれは、ことにてうあひ申へきに、此若一殿、御せいしんにしたかひて、いよ〳〵諸学に心をそめ、ふつしん、ほうみをおこなひ給てこそ、かれこれさうをふしてめてたかるへきに、その儀はかつてましまさす、うやまひ申せは、かへつてあつこう、ちやうちやくにおよふ、よし〳〵しゆとのことはともかくもあるへし、すてにちごたち、其ほかのわらんへ共にあまたのきすをつけたまへは、其しんるいとものそせう、たにことなり、自今以後、たうさん（5オ）に心さしあるとても、おさなきもの一人もあくる事有へからす、にやく一殿一人に一山のそせうをむなしくしたまふへきか、いさゝか御はからひあるへし」と、とうしんに申されけれは、慶心の給ふやう、「しゆきもつともいはれあり、

いかさま此ちこを親父のかたへおくり候へし」とそ申されける。やかて此事をちこにかたらんとし給へとも、このちこは人のけしきをみては、大のまなこにかとをたてゝ見いたし、ほうほねあれ、ちすちさしあらはれ、時〳〵のはかみしてにらまるゝあひた、師しやうなれともよりかねてそまし〳〵ける。さるほとにやう〳〵きけんをとり、ふけいの物かたり一つ二ついひいたし、そののち（5ウ）宣ひけるは、「御へんはよろつにさかしうましませは、けんぜ、たうらいまてもたのもしく思ひ奉れ共、一山のそせうこれ〳〵にて候へは、まつしはらくかたはらにもしのはせ給て、しゆとの儀をもやわらけて、其後おつてれうけん有へし」とおほせけれは、ちこはこれをきゝたまひて、扨はそれかしをにくみてのたまふそとこゝろへて、さらは一おとしおとさはやと思ひて、大の眼を見いたし、「われをこさかしきとおほせられ候は、何事かさかしく候、せひ承らん」といひけれは、弁心はせきめんしてそおはしける。ちこつく〳〵とおもふやう、「もとよりわかなしたるあくきやうなれは、かさねてとかくの儀にもおよはす、さらは（6オ）御坊、いとま申」とて出けるか、心のうちに思ふやう、日本国より此やまへのほりてはかみをそるそかし、我此山にひさしくすみ、そくたいにて寺をいてんこそほんいならね、かみをそらはやとおもへ共、はうをさへ追いたさるゝうへは、いつれのばうへかたちよるへき、つら〳〵ものをあんするに、日本国の中におそるへきもの三人なり、すてられたれともおやなれは別当、又やうぶにておはしませは大納言との、さて一字せんきんのかうおんなれはりつしの御房なり、またこと人をたのみてかみをそらするならは、これもししやうのことくうやまふへし、あらむつかしの事やとて、みつからかみをときわけ、じそり（6ウ）にこそしたまひけれ。

やかてかいをたもたんとて、かいだんさして行けれは、だうもりの法師ともこれをみて、「くたんのにやく一殿来りたまふそや、当山をはをひいたされ、いつのまにかしゆつけしたまひけるやらん、あらおそろしや、此人にみあひてはかなふまし」とて、から戸みかふしをしたてゝ、じやうをさしてかゝみけれは、程なくはせきたり、「こゝをあ

けよ」とのたまへとも、おとするものなし。「にくきものゝふるまひかな、一〻かうへをうちくだかん、たゝしかいをたもたんにせつしやうはしかるへからす、あけすはもの見せん」といふまゝに、とををしやふり、うちへいり見給へは、人一にんもなし。其後ひとも（7オ）ゆるさぬかいたんを、一ときはかりきやうたうして、「名をもほとけの御まへにてつくへし、わふそんさしもへたてなし、うちもはうなきものそかし、くきやう坊とやつくへき、てんしやうはうとやつくへき、それもあまり事あたらし、さいたうのむさし房といはるへし、ちゝの弁心のへんの字と、師しやうの慶心のけいのじをとり、弁慶とつくへし、さいたうの武蔵坊弁慶」と三度よび三度こたへ、「さらは仏の御まへにてかいをたもたん、扨五かいとは、せつしやう、ちうたう、しやいん、まふご、おんじゆ、この五かいよく〳〵たもつやいなや」といひて、われとこたへて、「まつせつしやうかいは、ものゝいのちをころさぬ事か（7ウ）、何といふとも、へんけいにあたをなしにくきものをは、ころさてはかなふまし、此かいをは御ほとけゆるし給へ、ちうたうかいと申は、ぬすみせぬ事か、へんけいほとのものかいかてかぬすみをはすへき、此かいはたもつなり、しやゐんかいは、女人にちかつかぬこさんなれ、当山のしゆとゝして、いかてか此かいをはおかすへし、これをもたもち申なり、まふこかいの事は、人をころさんはかりことには、まふこせすはかなふまし、このかいをはたもつまし、おんしゆかいの事は、くはんねん、くはんほうをいたさんとき、きやうとうの心おこらんや、へんけいにおいておんしゆする事あるへからす、五かいのう（8オ）ち三かいをはたもつまし、よく〳〵御仏きゝ給へ」と、みつからいひ身つからこたへ、はやかいもたもちたるとて、くきやうらいはいして、十町はかり行ところに、はゝきのちうきしゆんかいとて、六十あまりのらう僧、ちやうけんの衣にせいかうのけさかけ、長刀をつえにつき、ゆきむかふ。

其時弁慶たちより、袖をひかへて申やう、「これはかねてもきこしめしおよひつらん、しせんは御らんしたる事も候か、たうさん一のくせものにやく一丸、たゝ今出家仕りて候、名をはさいたうの武蔵坊弁慶と申候、法師にはなり

て候へ共、父にもしやうにもすてられて、ころもを一ゑもたす候、しかるへくは御はうの御衣をたひ候へ」（8ウ）といふ。しゆんかい聞て、「いやとよ、おもひもよらす」と申されけれは、へんけい聞ひて、「そなたは思ひもよする（マヽ）とも、こなたかおもひよりて候うへは」といふて、まなこにかとをたてけれは、しゆんかいこれをみて、ゑせものと行あひ、事しいたしてはあしかりなんと思、やかてことはをなをし、「さらは我坊へいらせ給へ、かわりのころもを参らせん」といへは、へんけい申やう、「御はうにてたまはらんもおなし事、たゝ是にてたまはるへし」といへと、ぬかれされは、弁慶（べん）はらをたて、こしをかゝめたるほとは、あしたはきたるしゆんかいとおなしやうにみえけるか、まなこにかとをたてつつとのひあかり、「にくき御はうのふる（9オ）まひかな、しやくそんとふいのしゆきやうを、さためて聞こそおよふらん、さつたわふじはいかなれは、うへたるとらに身をあたへ、じひ大わふとむまれ、はとのはかりに身をかけてこそ、しやかによらいとはけんしたまふなれ、さまての事なしとも、御房ほとの大みやうか、ころも一ゑにさほとのつゑへもあるまし、ころもやをしき、命（いのち）やをしき」といふまゝに、すてにくたんのかなぶちにてうたんとする。其時、「ぬき申さん」とて、いそきころもをぬかれけり。「したなる小袖もぬきたまへ、その大くちもぬき給へ」とて、かたひら一つにはきなして、われはしろきこそてに大くちをきて、ちやうけんの衣にせいかふのけさを（9ウ）かけ、ぬりあしだをはき、長太刀つえにつき、「よく候か、御坊」といふ。あしきとはいかゝいふへき、「一段よきほうしにて候」と申されけれは、「ほめられて候へは身にとつてはめんほくなり」といひけるか、心のうちに思ふやうは、あさましや、たゝいまほとけの御まへにて、ちうたうかいをたもちつるに、ぬすみたる事にてはなけれとも、をしむ物をおさへてとるは、もしかいをやふるにやならんと思ひて、「みくるしく候へ共、きかへをまいらせん」とて、直垂（ひたたれ）、おほくちにいろ〳〵のの（マヽ）小袖を、「これき給へ、御房」と申せは、「此としにていかてかさやうなるいろ〳〵しきものをき候へき」とのたまへは、「さやうにおほせられ候へは、一向（かう）（10オ）めんほくをうしなひ候、

たゝ理をまけてきたまへ」といふて、にらみつけたる眼さしのおそろしさに、ふるひ〳〵そきたまひける。かんだうをゆかんとすれは、大道へおひいたし、「さはかりのらうそうに御とうじゆくなくては見くるしく候、御とも申さん、中たうへ御にうたう候へ」とて、さきにをつたてゝそ参りける。中堂よりしゆんかい、いとまこひしてかへらんとしたまへは、すゝむるくとくなれはとて、「さんわふ七社へも御さんけい候へ」とて、せんたちにして、あるほとのたうしやふつかく残りなく参りける。もとよりしれたるものなれは、なきなたのゑをとりのへて、老僧のかしらのうへをひらめかす。あやうさに、い（10ウ）とゝこしをかゝめてそあゆみける。六十あまりのらう僧のこしをふたへにかゝめて、いろ〳〵のこそてにひやうもんの直垂きて、弁慶をこうけん人とみえけれは、おひてふたたひちこになるとは、かやうの事をや申へき。やうやくその日もくるゝほとに、しゆんかいのはうへおくり申て、「かゝる御ころもの心さし、申つくしかたく候、御坊をはよくみおき申候、又この衣ふるくなり候わゝ、なん時も心をかす参りて申うけ候へし」といひすてゝ、きやうのかたへそのほりける。

さてへんけいおもふやう、とても山は出つ、ゑせものゝ名をとる上は、日本国をしゆきやうして、いさかひをはしめて、我朝にわれにうへこす者（11オ）なくは、たうとへわたるへし、もし又われらにまされる人あらは、其とき大道心をおこしてじやうぶつすへし、なを〳〵上のめいしんあらは、しゆう共うやまひ、天下をたなこゝろのうちにきるへし、かくいさかひをせんには、たちかたなくてはかなふましとて、三てうのこかちかもとに行て申けるは、「これは右大臣むねもりこうの御つかひにて候、たちを四しやく六すん、かたなは九すん五分、おなしく二しやく一すんのうちかたな、此ふんいそきかねをあらため、うちてしんしやうあるへし、やかてふきやうにはそれかし参りたる」とて、まほりつめてこそうたせけれ。きすあれはうちなをさせ〳〵しける程に（11ウ）、百日めにうちたてさせ、おほきによろこひて、「はや〳〵出させ給へ、御ひきてものよき様に申てまいらせん」とて、うちつれてゆきけ

るか、「こゝにまたせたまへ」とて、かちをは門くはいにまたせをきて、我は御門よりかいちかふてそはしりける。一日まてともみえす。やう〳〵日もくれけれはふしきにおもひ、宗盛へまいり此よし申あけけれは、「まつたくさやうの事なし、そこつなる事を申」とおほせけれは、そくはくのそんをしなから、かへつてめいわくしてかへりけり。

其後弁慶たちかたなはふそくなし。たゝししやうそくに事をかきたり。そのころ五条の吉内左衛門とて、かなさいくの上手のありけるをたつね（12オ）ゆき、「これは小松とのの御つかひなり、此ぐそくともにしやうそくしてまいらせ候へし、やかてそれかしふきやうに参りたる」といふ。されはそのころ、平家のおほせといへは、何事にか異儀におよふへき、やかてりやうしやう申たり。「さて何とかつくり申さん」といひけれは、弁慶聞て、「上のおほせには、太刀は竹にとら、かたなはしゝにほたん、いかものつくり、まつしろにつくらせよとの御事に候」といへは、「やすきあひたの御事」とて、このみのことくにつくりいたしける。へんけいよろこひて、かなさいくの信定をあひくしてこまつ殿へ参りけるか、道にて申けるは、「此間それかしをよく御もてなし候事（12ウ）、又はたちかたなのかな具よくいてき申候、かた〳〵もつてよきやうに申、御ひきてものたてまつらん、しはらく御まち候へ」とて、内へ入にけり。日のくるゝまてまちけれ共みえされは、このよしこまつとのへ申上けるに、「さやうの事は思ひもよらす」とおほせくたされけれは、ちからおよはすかへりけり。

又其ころ七条ほり河に四ら左衛門吉次とて、はらまきさいくの上手有。弁慶このよしつくか宿所に行、「これは兵庫守頼政の御つかひなり、御しゆつしの時、直垂のしたにめすへきための御ようなり、くろいとおとしの鎧はらまき、おなしくさうのこて、すねあてともにとゝのへまいらすへし、引出物の事はのそみの（13オ）まゝなるへし、やかて奉行を申へし」といひて、さねをゑらひ、かなものをこのみけり。きりにほうわふのさうのこて、ひやくだんみかきのすねあて、はらまきともにおとしたてゝ、「御ぶきやう御らんせよ」とていたしける。弁慶これをみて、おほきに

よろこひ、「それかし御まへにてきて、具そくのかゝりを見申候はん」とて、かのはらまきにこ具そくさしかため、くたんのたちかたな、うちかたな共にとりつけて、かなぶちとりそへ、四しやく六すんのたちをするりとぬき、つほのうちへとひいて、「あら人きりたや」と大こゑあけて、おとりあかり〳〵しけるが、庭の桜をすんときつて、にわふだちにたつたりける。吉次これを（13ウ）みて、おもひいたしたる事あり、此あひた三てうのこかちと、五条の吉内をたはかりたる法師のあると聞つるか、さためてこれなるへし、あなおそろし、ひきてものこそとらさらめ、きられてかなふましとて、いそきうちへいり、しとみ、やりとをひきたて、すきまよりのそきけれは、へんけい申やう、「くるしうも候まし、出させ給へ、はらまきいま少物かるに候ほとに、ちとはしりて見せ候へし」といひて、くたんのひらかけをさしはきて、つゐぢをおとりこえ、両のくさすりをゆつりあわせ〳〵しけるか、其のちいつく共なくうせにけり。よしつく申けるは、「そんの事はくるしからす、此ものかありさまにては、いかなるめに（14オ）かあはんと思ひつるに、うせぬる事こそうれしけれ」とて、大いきつひてそゐたりける。

さてへんけいつく〳〵とおもふやう、すてにほとけの御まへにてたもちたりし、ちうたうかいをやふりぬるこそあさましけれ、さあらは徳人のもとへ行、たからをこひうけ、此三人のものともにさくれうとらせはやとて、其ころわたなへけんはのせうとて、京ゐ中にならひなきふんけんのものときこえけれは、かれかもとへゆかんとて、武蔵坊か其日のしやうそくには、くたんのはらまき、さうのこて、おなしくすねあてに太刀、かたなくし、なきなたつへにつき、いゑの四方を見わたせは、たいほくともうへおき、やくらひまなく（14ウ）あけ、四町まちに大堀をほらせ、らんくい、さかもき引かけて、わかたうおほくやくらにあかり、ゆみ矢、兵ぐとゝのへ、しせんの事もあるならは、てんまきしんの中なり共、かけ入へくもみえたりけり。されともへんけい、人をひとともおもはねは、はんしゆう、けいこのものにも目をかけす、もんのうちへあんないにもおよはすつつと入、にはのしらすをしつ〳〵とあゆみ、ひろ

ゑんにちかつけは、けんはのせう行治は、むらさきのおりいろに、くちはのしゝらうちちかへ、せいかふの大くちに、こかねつくりのかたなまへさかりにさしなし、はらまきにかぶとあひそへて、こなきなたをたてをき、いろ〳〵のさかなに大つゝ、へいし（15オ）立ならへ、たゝいましゆゑんすきたるとおほしくて、てうし、さかつきとりちらし、家のこ郎等ともに、ご、しやうき、すくろくうたせて、まことにけふある所へ、弁慶大のこゑにて、「これはをんこくより熊野へさんけいのしゆきやうしやなり、らうまいにつきて候、くら一つあけてたひ候へ」といふ。ゆきはる是をきゝ、大にはらをたて、「こはいかにしゆきやうしや、だうしんあれなかれ、ころもをき、けさをかけて、まことにうへるをかなしむこそ道ならめ、兵具をちやくし、蔵一つとこうこそふしきなれ、いかさまかうたう夜うちたくひとおほゆるそ、わかものとも、あれめしとれ」といふ。弁慶聞て、「得させん物こそくれさらめ、なんそ（15ウ）たうそくのひきかけこそにくけれ、いて〳〵さらは物みせん」といふまゝに、ゑんへおとりあかる。行治かなはしと思ひ、ちやうだいへにけんとする所を、つつとよりて、ゆきはるかうはこしみしととり、いつのまにかぬきたりけん、うちかたなをくひにおしあて、「つみつくりにころしはせじ、たゝ今のあつこうをならはさん」とて、かたなのつはもとよりきつさきまて、引あて〳〵しけるほとに、行治いきこゝちはなかりけり。す十人の若もの共さしよりて、たちかたなをぬき、ひしめきけれ共かいもなし。そのときへんけい申やう、「矢の一すちもいんとせは、此ほそくびをねぢきりて、御へんともかこしのかたな、一〻にふみおり（16オ）てすてんするそ」とて、大のまなこにかとをたてゝ、のひあかりたりけれは、其たけ七八尺もあるかとみゆる大の法師なり、いかなるきしん、てんまといふ共、これにはすきじとそおほえける。さるほとにゆきはるが女房はしりより申やう、「ゐ中とくにんのならひ、人を見しり申さぬなり、いまのていしゆがあつこうをは、ひらにわらはにゆるし給へ」と、手をあはせておかみけれは、弁慶聞て、「かふこそあるへけれ、其儀ならは」とてゆるしけれは、けんは、わにの口をのかれたるていにて、なから死に

てうちうつふしてふるひけり。女房たちより、「てはおひたまはぬか」といへは、此おんなをむかへていまた三日になるに、ふかく（16ウ）のいろをみせぬるよと、はつかしさに、「さて〳〵たゝいま命をすてゝ名をあけはやとおもひつれとも、いま一度御身にあひまいらせんとて、ふかくのいのちをなからへ候、扨も御坊のたちか、たひ〳〵うしろにあたりたるか、きれたるかみてたへ」といはんとて、あまりとうはくして、「御坊のたちかきいりたるか、せなかはうしろにありけるか」といひける。にようはうもあまりおかしさに、返事もなふてゐたりけり。へんけいはちやうたいまてすんと行、すく六はんにこしをかけ、あふきをひらきつかひけるか、又はら〳〵とたゝみて、草摺うつてひやうしをとり、いまやうをこそうたひけれ。「一期はかうとおもへとも、此世は（17オ）ほともなきものを、ゑいくはは春のゆめ、草はのうへにをくつゆの、かせまつほとのいのちにて、何とてたからををしむらん」と、かれうひんのこゑをもつて、うたひすましたりけれは、女房此よしうち聞て、「我ら前世のかいきやうにて、こんじやうはうとくの身となりたれ共、けうけするぜんちしきおはしまさぬに、いかされこれはほとけのはうへんにて、むしやう、てんへんのうきよをしらせ給ふとおほゆるなり、たからは何をかめさるへき、承てまいらせん」といふ。弁慶聞てよろこひ、「女房はおとこまさりたる善人そ」と、そゝろはつかしくおもひなから、「申かけたる事なれは、たからを見申て、ふんりやうを申へし」と（17ウ）いへは、くらをあけさせかす〳〵のたからを見せけるに、金ぎんへいせんは山のことく、ゆみ矢、たちかたな、其ほかまきもの、あやにしき、「何にのこる事はあらし、御このみ次第にまいらせ候はん」といふ。弁慶もとよりよくしんはなし。おほくののそみなし。「おりものゝ小袖三かさねとれうそく九十貫を、三疋の馬に付て、みやこへのほせて給候へ」といふ。女房これを聞、「あらこと〳〵しくおほせられつるほともなく、いとゆめ〳〵しき御のそみかな、たからとおほせけるうへは、くらの一つもめさるへきとおもひつるに、いとやすき事よ」とて、三ひきのむまに小袖とれうそくをつけて引いたしけれは、弁慶よろこひ（18オ）、「かゝる御心

さしこそありかたけれ、いかさま此せにみなになり候はゝ又申候へし」とて、きやうのかたへそのほりける。此馬(むま)ともを三人のさいくのもの共のかたへおくりける。思ひの外の事なれは、三人のものとも、「又いかなる事かあらんすらん」と、のちをおそれて、せきめんしてそゐたりける。

かくてへんけいは熊野(くま)さんけいと心さして出けるか、日くれけれはあるふるだうの大なるにたちよりてみれは、人の住ていもなし。やかて仏たんのしたに入、少まとろみけれは、夜半はかりに人のおほく来り、さつしやうかまへさかもりす。いかなるものともそとおもひけれは、きんないのぬすひとともなり。こゝかしこにての（18ウ）夜うち、がうたう、さんそく、かいそくの物かたりをしける。中にもおとなしき者申けるは、「こんやのより相、いかに御さため候そや、よしなきさけをすこし、こゐたかにめん〳〵の手から物かたりはむやく、かへにみゝ、天にまなこ、岩の物いふためしあり、ひそかに御たんかふ候はすは、まつそれかしはまかりかへり、今夜のうちにもりんかふにて、やせうしの一疋もひき、あすの市にてしろかへすは、さいしをなにとしてやしなひ候へき」と、事あたらしく申けれは、つきなるものこれをきゝ、「尤にて候、さあらはそれかし思ひよりたるとをりを申へし、いつくと申共渡辺(わたな)のけんはかもと程なるたからの山はあるへからす（19オ）たゝし夜うちなとにて、あつたらさいほうとり残さんはむねんなり、大せんにとりのり、兵ぐを船そこにかくしをき、一度に四方よりをしよせて、せめやぶらん事はあんの内なるへし」とて、一身とうしんにて、「さらは明日のたつのこくにせいをそろへ、むまのこくにをしよすへし」とさためて、みなたいさんする。弁慶これを聞てよろこひ、けんはか恩(おん)をなにとしてかおくるへきとおもひつるに、ねかふ所のさいわいとて、やかてけんはかもとへそ行ける。いまたさうてんの事なれは、「番衆(はん)はなきか、門あけよ」とて、うちに入けれは、けんは此よしをきゝ、「あさましや、又うきめをやみん」とふるひける。女房申けるは、「ふかく（19ウ）なりとよ、ゆきはる、きわめてたけき人は、よくもてなせはかへつてちうをなすならひあり、みつからにまかせ給

へ」とて、やかてわかたう二人いたしてしやうじいれ、しゆはんをすゝめかしつきけり。そのときへんけい、けふはいまたつとめをせぬとて、ぶつせんに参りて法花きやうをとくじゆする。もとより弁慶、ないてん、けてんくらからねは、くんとくにたか〳〵とよみけれは、行治も女房も、其外家のこ、わかたうとも、いままては鬼神のやうにおそれけるか、此御きやうをちやうもんして、かゝるちしきのあるそとて、かんるいきもにめいしけり。さるほとに時刻うつりて、四方よりむしやともみち〳〵て、けんはか（20オ）たちへをしよする。「これはいかなる事そ」とて、郎等共にとはせけれは、「くはうよりのおほせなり、いそき行治か首をもつてまかり出よ、さあらはさうひやうの命はたすくへし」とて、おめきさけびせめ入けれは、きんへんの下人共も上をおそれて出あわす。たちのうちにはわすか五十人にすきす。よせては二百余人たれとも、馬上は一騎もなかりけり。行治おほきにさはき、何ものゝさんけんにて、かゝるうきめにあふそとて、大手をうつてたつたりけり。へんけいはかねてしつたる事なれは、おとろくけしもなく、御きやうよみおはり、もとのことくまきかへし、「五十てん〳〵すいきくとく、いつはりましまさすは、たゝいま（20ウ）武蔵坊か手にかゝりしなんものとも、しゆつりしやうじ、とんせうほだい」とゑかうして、目しはたゝきてゐたりけり。さるほとにゆきはるは、大勢にせめたてられてむねんにおもひ、矢くらへあかり、二人はりに十二そくとつてつかひ、矢さまひろくひかせ、きり〳〵と引しめてひやうとはなつ。まつさきにすゝみけるかうとうの大将、かたみの次らかむないたにひしとあたり、矢庭にたふれて死けれとも、少もひるますせめたゝかふ。かゝりける所に、けんはか女房、弁慶かまへに行、「いかに御坊、一しゆのかけのやとりもたしやうのゑんと申に、あれすけさせたまへかし」といふ。むさし聞て、「やすきほとの事、すけて（21オ）参らせん」とて、しつかに物のくさしかため、大にはへとひをり、三間はかりあるしらかしの、まはり一しやくあまりあるやりのゑのあらつくりしたるをとりいたし、二三度ふつてみて、「あはれよきうちものかな、さあらはみかたのもの共、大門こもんをひらかせ、かけいつ

るていにてよは〳〵とひき、かたきを内へをひき入、みなせめいりたる時堀のはしを引はつし、みかたは弁慶かめてのかたに、一所ゐてけんふつせよ」といふ。下智にまかせて門をひらけは、あんのことく一度にとつとせめいるを、弁慶ゆんてにあひつけ、かのはしらをは中もんに立おき、なきなたにてあひしらい、したいにうしろへよりけれは、敵かつに（21ウ）乗てかゝる処を、くだんのしらかしにてすそをはらりとなきけれは、すゝみ出たる兵三十余人うたれける。二三とはらひけれは、てもとにてしゝたるもの百余人、てあしをうちおられ、或はほりへとひ入、みつにおほれてしぬるもあり。城の内へいりたるもの一人もいきてかへるはなかりけり。其後行治、おなしく女房、いゑのこ郎等ともよりあつまり、弁慶にむかひ、「これは神かほとけか、たゝ事にてあるまし」とて、手をあわせらいはいする。さるほとに弁慶申やう、「先度都へ付てたまはりたる小袖やれうそくに、此ものともか具そく、たち、かたなけうりやうすれは、さのみおとり候はし、扨行治はいそき上洛して、小松殿へ申上（22オ）られ候はゝ、定めてくんこうあるへし」といふ。むさし殿のおしへにしたかひ、京へのほり、此よし申あけけれは、あんのことく重盛きこしめし、「ひるいなきかうみやうそ」とて、御しよりやうをくたされ、いよ〳〵はんしやうしけるとなり。

其後武蔵坊、熊野さんけいをまつおもひとゝまり、いさかいしゆきやうにいてにけり。ほくろく道に下れり。やかてゑちせんのへいせん寺へ参り、仏せんにしはしねんしゆしてあんするに、ものをわすれたるやうなるかふしきなり、もしみちにてなにかおとしたるかと、いろ〳〵あんじけれともさる事なし。よく〳〵思は、この二三日いさかひをせすしてとぜんなるか、是にて（22ウ）あるへし、さらはいさかいをして、ほとけのゑかふにそなへ申さんとて、寺中をありきまはれ共、しかるへきあひてなし。あるはうへたちいりて見けれは、ちこ、大しゆなみゐたり。座上にはしゆゑんのていなり。ていしやうにはまりをける。此中にもへんけいかあひてにとおほしきものはなけれとも、けふ何事にもあはすは、心あしかるへしとおもひけり。そふして弁慶、かたきの大せいあるをよろこひて、もんより

内へすいさんして、「物申さん」といへは、「何事そ」とこたへける。まことはいふへき事のなけれは、「御ばうたちのけさせたまふものは、何と申物そ」といふ。人〻おこかましくうちわらひ、「これはものをしり（23オ）たる人は、まりといふそ」とこたへけれは、へんけい此ことはにとりつき、すゝみよりて申やう、「しらぬ事なれはこそとひ申せ、あらうれしや、いまこそよく承て候へ、まりといふ物は御はうたちのかしらによくにて候」といへは、しゆとの人〻いかり、「けふかる法師のことはかな」といひけれは、へんけいかさねていふやう、「此ほうしがひかめにて候か、かゝみを御らん候へし、まりもかしらもおなしやうに候へは、われらかやうなるそこつものは、めん〳〵のあたまをけつぶし候はん」といひて、大口あけてわらひけれは、わかき大しゆいかり、「いてさらはもの見せん」とて、おちゑんにとひあかり、めん〳〵に太刀、なきなたのさや（23ウ）をはつし、われさきにとかゝりけれは、弁慶はよろこひ、「まことに仏神のはからひにて、けふのなくさみまふけたり、あらいたいけの御はうたちや、こゝは所もせはく候とも、ぐそくにてあやまちしたまふなよ、こなたへ出させ給へ」とて、大庭さして出けるか、こしよりふへを取いたし、ねとりさましていふやう、「うれしや、けふは少なれ共、いさかひをしはしめたる事のおもしろさよ」とて、あふきをひらき、これへ〳〵とまねきけり。しゆとの中に、いにしへゑいさんにすみし法師見しりて、「しはらくしつまり給へ、これこそおとに聞えたるにやく一丸とて、さんとう一のかうのもの、山をは追いたされ、我と出家して、さいたうの（24オ）むさしはう弁慶といふくせものよ、一さんかおこりても、うたるゝ事は思ひもよらす、むやく〳〵」とて、引けれは、すゝむもの一人もなし。其時弁慶、やすからすおもひて、あの坊へゆきては、「しゆきやうしやに物みせんとおほせられし大しゆは、これにましますか」といひ、此寺へ行ては、「ものみせんとおほせ候かた〳〵は、いつくにわたり候、ちとけざんにまいらむ」と、はしりめくれとも、出あふ人こそなかりけれ。

此うへはちからなしとて、へいせんじをいて、ほくろくたうのいさかひ、かといてあしゝとて、又中国にくたりけ

るか、ほとなくはりまのしよしやへ参り、仏前(ぜん)にて心しつかにねんじゆして、しんきれい智信(ちしん)の五（24ウ）じやうをさきとして、けつしやうを五かいとたもちたり。ほとけの御まへに六しゅのくもつをとゝのへて、三つのくけんのこうをつみ、いんくはの道理をこゝろにかけ、ことさらつみをいましめたり。しはしさんろうしてありけれは、けふかるふせいの法師かなと、しゆとみなこれをてうあひす。ある人申けるは、「さいたうの武蔵(むさし)房弁慶とて、めいよの大おこのものときゝつるに、ねんころなるていにて、きやうほうをなしけるふしきさよ、まことのへんけいにてはよもあらし」といふ。又ある人の申けるは、「悪(あく)につよきものはかならす善にもつよき」と申て、すてに大しゆ二人そうろんして、「むさし」といへは、「いやへんけい（25オ）にてはなし」といふ。又わかき大しゆ申けるは、「ろんはむやく、たゝなふりてみよかし」といへは、みな、「もつとも」とて、やかてむさしにさけをすゝめける。もとより弁慶大酒なれは、すはいのみ思ふまゝゑひ、大かふたうのかたはらに、前後もしらすふしたり。よきおりからとて、右のほうに、

いろくろくあれにあれたるへんけいを
よく〳〵みれはむさしばうかな

弁慶これをはしらすして、おとろきおきて、ときうつりなんとて、ほとけの御まへにてはなをさゝけらいするに、ちこ、ほうし、むさしをみて大にわらひけれは、いまにはしめぬ武蔵かつらそかし、もし日ころのあくきやうつ（25ウ）もりて、はなはし人にかゝれたるかと思ひて、さくりけれ共、こ具そく一つもかけす。さて、はすいけのはたに行て、水かゝみをみれは、かゝる事を見出して、あら道理のわらひ事や、人のうへならは、さこそおかしかるへしと、みつからみにむかひて、よこ手をうちてわらひけるか、弁慶おもふやう、人のなしたるわさはひを、かへさていかゝあるへきと、このはちをすゝかんとすれとぬしをしらす、いかゝせんとおもひけるか、もとより利こんはひとに

すくれたる事なれは、きてんを得て、其ころのちやうり、かためつふれて、こゑ少おんにておかしかりけるを、らくしよにして、とかめん所をたよりとして、ほんまふをと（26オ）けんとおもひて、やかて大かうたうのはしらに、しよしやほうしわれひきめにそにたりける

かためしいてはいつるおとなし

おりふし、ちやうりのとふしゆく、にうたうしけるか、是を見て、此よしかくとかたりけれは、ちやうり大にいきとを、同宿（ママ）、わかたう（しゆく）、ものゝ具ひし〳〵とさしかため、かふたうへのほり、かねをはやくつかせ、さんちうの衆をそまたれける。かねにおとろきて、大しゆはよろひきてもかぶとをきす、ゆみをもち、矢（や）をとる物もとりあえす、みな大かう堂へそのほりける。ちやうり大しゆにむかひて申されしは、「われ当山に上りて、六十よねんのせいそうをおくり（26ウ）むかふ、かた目の事は、きんねんらうたいによつてそんじたる事、そのかくれなし、こゑはもとよりせうをんなり、いまし（ママ）めてらくしよにおよふ事、いこんせんはんなり、あいてをしらぬ事なれは、せうぶをけつするにあたはす、しよせんはらをきり、らうごのはちをきよめん」とて、すてにかたなのつかに手をかけれは、大しゆをの〳〵とりつきて、「おほせもつともよきなし」と、さまゝに申とゝめ、大しゆゆめ〳〵そんしらさるよし、きしやうもんをそかひたりける。さてはきやくそうか、しゆきやうしやのわさやらんとて、きやく僧、しゆきやうしやを一ゝにからめて、かうたうのまへにひきすへたり。弁慶（27オ）は仏せんにつとめしてゐたりけるか、いまは時分よくなりぬとて、おひの中よりくたんのしやうそくとり出し、かちんのひたゝれの、きくとぢしけくしたるをき、黒（くろ）いとのはらまき、こて、すねあてさしかため、四尺六すんのたちをはき、うちかたなにかなぶち十もんしにさしそへ、ゆんてのわきにまさかりをもつて、めてのわきに長太刀かいこふて、たかあしたをはき、大しゆの中へおとり出、四方を見まはし、「あらおひたゝしの大しゆや」といひて、からめおきたるしゆきやうしやともを、くたんのうちかた

なぬき、一〻になわをきりてはなす。そののち弁慶、まなこにかとをたて、大しゆたちをはつたとにらんて、「たうさん（27ウ）の大しゆはこゝろかしやけんにして、くほうしゆかくの心なし、かかる所にましますしゆ行しやこそはかなしけれ、な無さんほう」ととなへて、二わふたちにそたつたりける。其時ちやうりの一のてし、しんおん坊めうしゆんといふ人、むくらんちの直垂（ひたたれ）に、もゑきおとしのよろひきて、三まいかぶとのをゝしめ、三尺一すんいかものつくりの太刀をはき、しらゑのなきなたわきにかいこうて、大しゆの中よりすゝみいて、大おんしやうにて申やう、「そも〳〵たれがはからいにて、あの御房は人もゆるさぬに、しゆきやうしやのなはをはきりたるそ、其うへしゆとのまします所に、たかあしたこそらうせきなれ、それぬき（28オ）候へ、ぬかすははからふへし」とそ申ける。へんけいこれをきゝ、あさわらひして申やう、「あしたをぬけとや、たうさんにむさしかうやまふへきひとなし、わふもましまさす、師しやうもなし、扨たれをかうやまふへきそ、たゝし、しん儀れいちしんのはうなれは、いかゝぬく（ママ）へきなれとも、弁慶かつらにらくかきせられたるあたに、しゆとのつらのうへをふみたりとも、ひか事にてはよもあらし、はしらにかきたるうたはそれかしかわさなり、さら〳〵しゆきやうしやたちにとかあらし、はかりことをもつてしゆとをあつめて、そのなかにてあひ手をたつねきかんためなり」といふ。しんおんばう聞て、「よしたれもせよかし、御房（28ウ）にそれほとあつこうせらるへきもの、当山におほへす」といふ。へんけいきひて、「さては御へんかかきたるか、かゝさらんものゆへに口きゝかましくさし出て、まつかううちわられな」といふ。其ときしんおん、何かわたまるへき、長太刀とりなをし武蔵にとんてかゝる。へんけい、かいちかふてなきなたをうはひとつて、かうたうのうへになけあけたり。しんおん長太刀をとられて、たちをぬいてきつてかゝる。弁慶是をみて、「御ふんもこゝろはかうなり」とて、うちそはめて、これをもかうたうのうへになけけり。具そく共はとられて、あまりにせんかたなさに、あたりなるあんしつへはしり入、大なるもえくいをもつてうつ（29オ）てかゝる。むさしはううちわらひ、

「はくちうに火をふるは何事そ、あやまちするな」とて、これもうはひとりて、おなしく堂のうへにうちあけたり。しんおんこらへかね、むんすとくまんとはしりかかるを、弁慶につことわらひて、ゆん手のわきにかいはさみ、「つれ〳〵なるに、こほうしともかかしらをはりてあそはん」とて、かなぶちをぬきいたし、かぶとのはちをちやうとうつ。しんおんかとうしゆくにたんこはう是を見て、ふしなはめの鎧を草摺なかにきなし、五まい甲のをゝしめ、四尺あまりの大だちうちふりきつてかゝり、弁慶かまつかふ二つになれとちやうとうつ。いつのまにかはとりあはせん、わきにはさみ（29ウ）たるしんおんにて、ちやうとあはせたり。たんこ坊かたちをふるより、むさしかしんおんをふりまはすは、いとかる〳〵とみえたりけり。そのときしんをん、「我をきるな、たんごはう」といへは、たちをすてゝかかるを、へんけい此法師をもわきはさんて、甲とかぶとを一度にからりとうちあはせ、「よきかねのをとかな」といふをきゝ、大しゆはこらへかね、一とにたち、なきなたのさやをはつし、きつさきをそろへてきつてかかる。弁慶申やう、「しこうしとつくはよ」といひて、二人のかふとゝ〳〵を、したゝかにうちあわせけれは、みちんにくたけてしにけり。其のちかた手になきなた、かた手にまさかりをもつてきつてかゝり（30オ）たるは、てんくはうのひらめくがことく、へんけいはきりあてられねはてもをはす、あたる矢もさねよきはらまきなれはうらかゝす。其のちたちをぬき、せんこ、さうをさしかためて、一はうへおひむけてきつてまはるあひた、たちまちむねとの大しゆ五十よ人きりふせて、大せいを東西へはつとおひちらし、へんけい、なかにあるかとおもへはぬけつくくつつ、せんこさうをとひめくるほとに、いる矢もあたらす、けつく大しゆおほくいころさるゝさる程に、いくさ中はにま風しきりにふきあけて、かうたうのうへになけあけたるもえくい、たちまちやけあかりけれは、しゆとこれをみて、「あなあさましや、きやうろん、しやう（30ウ）けうをとり出せ」とて、十方へはしりける。弁慶は是を見て、門前さして出けるか、立帰申やう、「がらん、ふつたもうらみ給ふな、しゆとの悪行あらは、いくたひもみたうのわかれしたまふ

へし、さりながらはうへんをもつて、此たひはやかて弁慶がつくりてまいらせ候へし、いよ〳〵しゆとの悪行をしめし給へ」とて、京へそのほりける。

しよしやより京へは上下四日あまりの道なるを、むまのこくのおわりに軍はてゝ、さるのおわりに京へのほりつきて、先内裏へ参り、「播磨のしよしやさん、けふの馬の刻にゑんしやう仕候、いそき御さうりうあるへし、しからすは天下の御大事たるへし、是こそがらんの御つかひなれ」と、大おんあけて（31オ）申、いつく共なくうせにけり。又入道相国、小松殿へも行、いまのことくふれよはりてうせにけり。さる程に禁中にもおとろきおほしめし、入道相国へ勅使を下され御尋有。やかてこまつ殿より、しよしやへはや馬をたてゝたつねらるゝに、上下四日にはせのほりて、事のよしを申。清盛父子ともにさんだいあつて、「かゝるふしきこそ候はね、馬のこくの事なるかさるのかしらにつけきたる事、にんけんのわさにはあらし、まことに、からん、仏菩薩の御はからひにて候」、すなはちじやうかい、こんりうの御うけ申され、いそきかぢ、はんしやうをめしくたし、やかてしよしやさんこと〳〵くたてられけり（31ウ）。

（未完）